

障害児教育部会

杉山 敏夫

子ども理解と授業づくり 「国語だいき、先生 つぎなにやるの?」を出版

物語の読解は、子どもの中に潜んでいる言葉の世界を引き出し、意味づけ、イメージもふくらませ、物語の内容が自分にとってどういう意味があるのか、自分と対置させながら自分の世界を豊かに広げていきます。そして、まんざらでもない自分や頼れる友だち、先生を知りながら自己を確立していく学びです。そんな願いや思いを持った知的障害特別支援学級の3本実践記録を、「国語だいき、先生 つぎなにやるの?」として出版しました。

5・6年生の実践では、子どもたちから「話した通りに書いてほしい」と要求されます。ですから、どのような表現も全面的に受け止め、書き連ね、「なるほど、友だちはそう考えているんだ」などと確認しあいます。学びあいの一員となった教師に対しても、「ところで、先生はどう思うの?」と子どもたちは問いかけます。

登場人物になり切って集団で物語のテーマを確認しあった実践。「一番思い出に残っているのは国語の読み取りで、友だちと意見を言い合ったことでした」と、子どもが卒業文集に書くような実践記録です。

2・3年生の、学年の幅のある子どもたちは情緒的に不安定で、「当初は交わらない・交われない」「相手の気持ちをわかってとせず、発する言葉がとげとげしく攻撃的」「自分本位で、自分を先に主張しないと自分が消されてしまうから、『言わないで！僕が先に言うから！』と主張することがありました。それが、自分たちの今の気持ちを表現したくなるような物語の読み取りを通して、「それは違うよ、僕はこう思うよ」「ふーん、そういう風に感じたんだ」「なるほど、そういう見方もあるよね」などと互いのちがいが認め合えるようになっていきました。休み時間にどんなにいさかいを起こしていても、

国語の時間になると集団で読みを深めていく集団に変わっていきました。

低学年の、文字や言葉がまだまだ不十分な子どもたちに豊かな言葉の世界を、教師は、リズムカルで登場人物を自分たちで操作できるように絵本から入りました。文字を読むのが苦手な子には豊かな言葉の世界に参加してほしい、感覚過敏の激しい子には、その過敏性も乗り越えられるようになってほしいと願いました。「バルバルさん」という動物たちが訪れる床屋さんの話に取り組みました。床屋さんごっこで触れ合い、絵本の内容を、劇遊びを楽しみながら体験していきました。夏休みのある日、首筋などを触られることに超過敏な子どもが、その絵本を持って床屋さんで散髪してもらったのです。

発達・障害・生活面での複雑さを抱える子どもたちのわからなさやできなさ、揺れ動く心に共感し受け止め、自己の育ちにつながる学びとは何か、と試行錯誤しています。部会は、二ヶ月に一度のペースで行っています。「特別支援教室」も含めて通常学級の先生たちの参加を期待しています。

(青梅・西中)